

## 第100回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 2014年11月19日(水) 15:00~17:00
- 2 場所 関西大学千里山キャンパス 関西大学会館 常任理事会議室
- 3 内容

### (1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

- ・乾 善彦 文学部教授

発表テーマ『漢字仮名交じり』の謎ー日本語はなぜ漢字を捨てられないかー

- ・福永 健治 化学生命工学部教授

発表テーマ「魚介類の摂取と健康」

### (2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

#### ① 『COIL (Collaborative Online International Learning)』

国際シンポジウムの開催について

資料1

#### ② 大学院ガバナンス研究科博士課程後期課程の開設について

資料2

#### ③ 関西大学地域連携事例集の発行について

資料3

#### ④ 国立循環器病研究センターとの連携協定締結について

資料4

#### ⑤ 総合図書館ラーニング・コモンズの開設について

資料5

#### ⑥ 法科大学院ロースクール体験フェアの開催について

資料6

#### ⑦ 第11回三大学連携事業の開催について

資料7

#### ⑧ 2年次生父母・保護者対象キャリアプランニングセミナーおよび

1年次生父母・保護者対象キャリアデザインセミナーの開催について

資料8

#### ⑨ 関大生の活躍について

資料9

### 4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、

乾善彦文学部教授、福永健治化学生命工学部教授、池田佳子国際部准教授、

松並久典総合企画室次長、中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

### 5 参考資料

(1) 関西大学通信 第435号、第436号

(2) 第43回生涯学習吹田市民大学関西大学講座(後期) チラシ

(3) シンポジウム「大学ミュージアムを熱く語る」 チラシ

(4) 行事予定表(11月~2015年1月)

以上

### 【次回(第101回)記者懇談会開催予定】

日時: 2015年1月30日(金) 15:00~17:00

場所: 千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

# 「漢字仮名交じり」の謎

—日本語はなぜ漢字を捨てられないか—

文学部教授 乾 善彦

## 【概要】

現代日本語の表記は「漢字仮名交じり」という世界にも類を見ない表記法を標準とする。そもそも、「ことば」と「文字」の関係は、必然ではない。世界には書く習慣のない「ことば」は何千と存在するし、アルファベットは、英語をはじめドイツ語フランス語イタリア語など、西ヨーロッパの異なる多くの「ことば」を書きあらかず文字として、汎用性が高い。「ことば」が「文字」を要求しているのではないことが明らかである。

日本語は、はじめ文字をもたなかった。中国語を書きあらかず文字である漢字に出会って、書くということをはじめ、やがて、日本語を書きあらかずための文字である「ひらがな・カタカナ（仮名）」を創り上げた。

ところで、ある「ことば」を書きあらかずのに、文字は一種類あれば必要十分である。したがって、「仮名」が発明された時点で、「仮名」だけで日本語を書くことは可能であり、事実、それが行われたこともあるし、現代でも、子ども向きの絵本は、平仮名だけで書かれるものが多い。

世界を見回して、二種類以上の文字を用いるのは、日本語のみである（厳密には、韓国語も近いところがあるが）。なぜ、日本語を書くための文字を自ら創出しながら、それを専用せず、漢字仮名交じりが現代語表記の標準となっているのか。それを、日本語が漢字とであって、独自の日本語表記法を案出する歴史から考えてみる。

近年、新たな国語資料として、7・8世紀の木簡、9～11世紀の墨書土器が出土し、従来の見解を大幅に修正せざるをえなくなっている。そうした最新の成果を報告すると同時に、同じような歴史をたどったはずの韓国語が、漢字を捨てるのに成功したのにもかかわらず、日本語ではなぜそうならなかったのか、韓国語との相違も視野に入れ、日本語と漢字の密接な関係について考えているところを報告したい。

## 【プロフィール】

1956年、奈良県北葛城郡（現葛城市）生まれ。大阪市立大学文学部、同大学院文学研究科博士前期課程修了、同後期課程単位取得退学。2003年、博士（文学）の学位取得（大阪市立大学）。帝塚山学院大学、大阪女子大学（統合により大阪府立大学）を経て、2008年より、関西大学教授。専門は、国語学（とくに日本語文字・表記の史的研究）。日本語の文字・表記の通史を目指している。主な著書、『漢字による日本語書記の史的研究』（2003、塙書房）、『シリーズ日本語史 1 日本語史のインタフェース』（共著、2008、岩波書店）など。

# 魚介類の摂取と健康

福永健治\*

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

日本は、世界中で平均寿命、健康寿命の長い国として知られている。近年、世界中の医学・栄養学の研究者が日本食の健康有益性を高く評価し、研究を進めている。世界が注目する日本食とは、米飯が主食で主菜に魚介類が並ぶことが多く、野菜、豆類が豊富で、畜肉や乳製品も少なからず含まれる食事である。欧米食に比べれば、低脂肪、低カロリー、高食物繊維で、魚介類の摂取量が多いところを欧米人は健康な日本人に重ねたのである。

日本食の代名詞とも言える魚介類の健康有益性が世界中で広く知られるようになったきっかけは、日本発ではない。1970年代半ばグリーンランドイヌイットの食生活を調査したDyerbergらの報告が発端である。アザラシや魚を主食とするイヌイットは、高脂肪食であるにもかかわらず、デンマーク白人に比較して心血管系疾患の死亡率が非常に低いことがわかった。その後、心血管疾患予防効果の一つが、アザラシや魚に豊富に含まれるイコサペンタエン酸(EPA)やドコサヘキサエン酸(DHA)といったn-3系高度不飽和脂肪酸(n-3PUFA)であることが解明され、多数の疫学調査、介入試験をもとに有効性が検証、確認されるにいたっている。

EPA、DHAは血清中性脂肪低下作用のほか優れた抗血栓作用を発揮するため、動脈硬化性疾患に万能であるかのように誤解されている。例えば、動脈硬化性疾患の危険因子の一つである血清総コレステロール

(T-Chol)および低密度リポタンパク質Chol (LDL-Chol)の低下作用もあると誤解されることもある。しかし、EPA、DHAにそれらの低下作用は期待できないばかりか、病態によっては反対に上昇する。

これらの事象を解明すべく演者らは、動物実験を行い、魚食によるT-CholおよびLDL-Cholの低下作用は、EPAやDHAではなく、脂質を除いた主要栄養成分であるタンパク質にあることを明らかにした。すなわち摂取した魚肉タンパク質およびその消化物によって小腸でのChol吸収および胆汁酸再吸収阻害、肝臓でのCholの胆汁酸への合成増加が引き起こされ、T-CholおよびLDL-Cholの低下が見られることを関連遺伝子の発現レベルで明らかにしている。

魚介類に含まれるEPAやDHAは生活習慣病抑制に万能ではない。適切なバランスの元にその効果が発揮されることは、他の食品成分と同様である。今回の講演では、上述の他にも明らかになりつつある魚介類の摂取による健康機能性の発現機序について、最新の知見を元に解説する。

-----  
\*1993年北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会PD特別研究員、財団法人応用生化学研究所を経て1995年関西医科大学助手。その後講師、助教授を経て2003年関西大学工学部助教授、2010年より関西大学化学生命工学部教授、現在に至る。